月の影

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の影

【Ｎコード】
Ｎ００２５Ｔ

【作者名】
奥田徹

【あらすじ】
三年ぶりに帰った実家。父親の葬儀。私は母親から受け取った古い子熊のぬいぐるみを眺め、静かに思い出す。結局何が起こったのかを…。忘れ物は無いですか？

（前書き）

１９９８年に書いたお話です。パソコンのファイルの片隅に埋もれていました。この小説の内容みたいです（笑）どうか読んでやってください。

先週の日曜日、父の葬式があった。
父は金曜の午後に昼寝をしたまま干からびた蛙の様にコロッと死んでしまった。
母はそれに気づかずに風邪をひかない様にとタオルケットを父に掛けてあげたんだと何度も瞬きを繰り返す眼を押え寂しそうに言った。

私は三年振りにこの我が家へ帰ってきた。
父が昼寝をしていた和室の横の縁側で夜空に浮かぶ三日月を眺め、田舎の夜の暗さと父の事を考えていた。左手には日曜の晩、
母から受け取った古い子ぐまのぬいぐるみが月明かりに照らされ、それが私を切ない哀愁の世界へと誘っていく。

初めて二人きりで買い物に行ったのは私がまだ五歳の頃だった。小さい頃から父は仕事で家を空けることが多く、私は父と話をした記憶がろくに無い。
そんな父は私と二人きりにされた事で妙にそわそわしている様に見えたのを今でも鮮明に覚えている。家の近くの角を曲がった先にある酒屋の前のバス停でバスを待った。
酒井医院と広告が入った背もたれのある横長の青いプラスチック作りのベンチに二人で並んで腰掛けた。父はバスを待つ間しきりと
「喉は乾いてないかい？」だとか

「幼稚園では何して遊ぶの？」とか
「好きな男の子はいるの？」なんて話かけてきたのだけど私はなぜか子供心にそんな父がよそよそしく思えて，あまり楽しそうな顔をしていなかった気がする。
そのうち父もそんな私の気持ちを感じ取ったのか口数が途切れ途切れになっていた。
私の住んでいた地方のバスは到着時間の間隔がかなり開いていて、特に日曜日ともなると通ってないと同じようなものだった。
だからか父は家を早く出てきた事をしきりに悔やんでいた。私はそれを横目で感じつつ海色の空を海草のようにゆっくり泳ぐ雲の切れ端をじっと眺めていた・・・。

暫らくしてバスが到着すると私と父は機械から飛び出る整理券を手に持ち，誰一人乗っていないバスの一番後ろへ腰掛けた。
父は席に座るとキャラメルをすっと差し出した。私はすぐさまそれを口の中へ放り込みにっこりとした笑顔を父へと向けた。
私がクチャクチャとキャラメルを食べる音を聞きながら父は私と関わる事への不安を隠す様に、暫らくただ、ジーっと外ばかり見つめていた。
「パパ・・」
「いつ着く？」
「あと十分ぐらいかなぁ・・」
「じゅっぷん？」

「うん。」
「じゅっぷんて長いのかな・・」
「んー・・綾ちゃんパンケーキは作った事ある？」
「うん。あるよ。ママと。」
「じゃあケーキが焼きあがるぐらいかな・・」
「へー、・・じゃあ楽しみだね。」
「そうだね。楽しみだね。」
私と父は少しでも自分の不安を取り除くかのように手探りの中お互いの言葉を口にしていたような気がする。

商店街に着くと私は息せき切った様に走り出した。ある意味遊園地的な感覚に誘われる。商店街の所々にある中世の騎士が持っている槍のような形をした街灯。そこに様々な旗がぶら下がっていて私を異世界へと招き入れてくれる。
数あるお店の前を進んで行くごとに気持ちは分散され，小さかった私の眼は全ての物が巨大に見え、興味の対象としては充分だった。

ふと立ち止まって周りを観回してみた・・。

目の前にひしめくのは行き交う人々の足の交差ばかり、私は突然の不安に襲われた。
それは本当に突然のものだった。
「そんなにはしゃぐと迷子になるよ。」
暗闇から救い上げてくれる。ゆっくりと笑顔で歩いてくる父が視界に入った時、体中に安

心感が走り，そして私の中にその日初めて
父を受け入れる準備が出来たのかもしれない
・・・。
「どうした？」
私は父の足にしがみついていた。
「おもちゃ屋さんに行く？」
私は顔を上げて父を確認している。父は何が
起きたのかと、とても不安そうに私を見つめ
ていた。その顔を見たとき初めて、
父に向かって素直に笑顔を向ける事が出来た
んじゃないかと思う。その時確かに私は父を
必要としていたんだ。

おもちゃ屋さんは商店街のちょうど中間ほ
どの場所にあった。私は父の手を握りながら
ショーウィンドウに並んでいる色白の足を突
き出したマネキンや、パチンコ屋の中から出
てくる草履履きのおじさんのガニ股や、焼き
栗を売りながら大声を上げている割烹着姿の
おばさん等を見たりしながら、父の手の温も
りを感じていた。

おもちゃ屋に到着すると、店頭に三つほど
並べてある小さな鼓笛隊の小猿人形が奏でる
ドラム太鼓のリズムと共に私の気持ちがどん
どん高揚していくのが解る。
私は父の手を引っ張りながらも視線の先で
は所狭しと並べられているテレビアニメのヒ
ロインやヒーロー、動物園では見ることの出
来ない小さな象やきりんのぬいぐるみなどの

異次元の世界に目を奪われていた。
「いらっしゃいませ。」
パンダの刺繍の入ったオレンジ色のエプロンのお姉さんが笑顔で話しかけてくる。
「何かお捜しですか？」
と言って、私の顔を見てにっこり笑ったので私もお姉さんに向けてニヤッと笑顔できり返した。
「決めてきてないんです。ちょっと見させてもらってもよろしいですか？」
と、父が申し訳なさそうに言うと、
「どうぞどうぞ。ごゆっくり。」
と父にも笑顔で答えていた。
「なんでもいいの？」
「んー、一つだけならね。」
私は父の顔を確認した後、宝の山と化しているお店の中へ走り出した。
「走ると危ないよ。」
「わかってる！」
私は目の前いっぱいに広がるこのおもちゃがどれでも一つだけ私のものになると考えるといくらそれが大好きなチーズケーキやグラタンの上のおこげだとしても高ぶるこの気持ちを押さえる事は出来ないんじゃないかと思った。
　商店街のお店のほとんどは、一店舗が十人入ればいっぱいというほどで，あまり大きくなく、このおもちゃ屋も例外ではなかった。でも、その狭さが私を暖かく包み込む夢の世界へと引きこんでくれた。私はお店の中の対

象物を次々と移動してはこれでもない，これでもないと考えてみる。
「こんなのはどう？」
と父が楽しそうな顔で私の前に少し小さめのけん玉を差し出してきた。
「イヤッ！」
と、私が間髪入れずに言うと父は少し間を置いた後、
「そうだよね綾ちゃんは女の子だもんね・・」
と納得して退散した。
私は少しばかりの罪悪感が過ったが，ケン玉を嫌がるのには少しばかりの訳があったのだ。
　その頃私の通っていた幼稚園にもケン玉が一つだけあって、何故一つなのか詳しくは知らない。そのケン玉はブームとまでは言わないけれどみんなで競いあう様にしてやってた時期があった。自慢じゃないけど私はズバ抜けて下手だった。しかし世の中には下には下がいるもので、不幸にもこの私より不器用にケン玉を操る男の子がいた。
私はこれよとばかりに、その子が失敗を繰り返すたび、ケラケラ笑い馬鹿にしていた。ある時、いたくプライドを傷つけられ堪忍袋がはち切れたその男の子は、私に向かっておもいきりケン玉を投げつけてきた。幸か不幸かそのケン玉は紐に繋がっている丸い玉のおかげで奇妙な遠心力を描き、私のいた黒板の前とは全く別の窓ガラスへ的中した。その事件のおかげでいつしか私達の周りからケン玉を目にする事は無くなり、私の中でケン玉は、

ガラスを打ち砕く凶器へと変貌しのだ。

そんな訳がある事をその頃の私が説明できるほど器用ではなく，無邪気にケン玉の失敗を繰り返す父の横顔を見ながら何とも言い表せられないもどかしさを感じていたのを覚えている。

暫らくして私の興味の対象は小さなウサギのミニチュアハウスに集中していた。
私は父を呼びに行こうとお店の中を観回して見た。店の一番隅のフロアのプラモデルが重ねられた場所の、そのまた上に横一列に並べられた沢山のぬいぐるみ達。その中の一点を見つめ父は立っていた。
「なに見てるの？」
私は気になり，父に近づき訪ねてみる。
父は私を確認した後
「ん？・・ほら。」
と、棚の一番隅を指差した。
その先には，恰も時代に取り残されてしまった事をジッと受けとめる様に、少し古びた小さなクマのぬいぐるみが静かに座っていた。
「パパね，昔あれとそっくりの縫いぐるみを持ってたんだよ・・」
ぬいぐるみを見つめる父の寂しそうな眼差しを見上げた後，もう一度クマのぬいぐるみを見つめてみた。
その古びた飾り気の無い風貌は切ないほど優しく、そして心の中の何かを救い上げてくれ

る。そんな気がした。
父はため息を一つついた後、
「何買うか決まった？」
「パパ・・」
「ん？」
「あれ買う。」
私は子ぐまのぬいぐるみを指していた。
父の顔は仰天していた。
「いいの？もっと可愛いお人形さんあるよ・・
いっぱい」
「いい。あれ買う。」
自分でも気づかないほど早く、私はその決断
をしていた。そこに全く後悔は無かった。

私達の様子を入り口の横にあるレジの前か
ら見ていたパンダエプロンのお姉さんが、父
と目が合うとニコッと笑いヒョコヒョコと近
づいてきた。
「お決まりですか？」
と、教育テレビのお姉さんのような満面の笑
みを私達に向ける。
「すいません、あれ売ってもらえます？」
父がぬいぐるみを指しながら申し訳なさそう
に言うと，お姉さんの笑顔が一瞬驚いた顔に
見えた。
「あの子グマのぬいぐるみですか？」
と拍子抜けしたように言い、今度は不思議そ
うに父を見つめる。
「はい。え、・・飾り物じゃないですよね？」
お姉さんの反応を見て、父が小さな作り笑い

を浮かべ聞き返す。
「あ、いえいえ、少々お待ちくださいね。」
と笑顔に戻りレジの方へまたヒョコヒョコと歩いて行った。私はそんな様子をあんぐり口を開けて伺っていた。お姉さんがレジの下からランドセルぐらいの踏み台を取り出し、こちらへ戻ってくると、それに乗り背伸びしながら子グマへと手を伸ばした。
「このぬいぐるみ・・まだ母がこの店を切盛りしていた頃からずっと、あの場所に座っていたんですよ・・」子グマを手にするとお姉さんは少し寂しそうに言った。
「ちょっとホコリかぶっちゃってますね、今きれいにしますから・・」
お姉さんは優しく笑顔を向け、いそいそとレジの方へ戻ると、小さなハタキを取り出し、ポンッポンッとなでるようにホコリを飛ばしていく。その姿はどこか親しい友人と最後の別れの言葉でも交し合っている様にも見えた。
「お包みしますか？」
「いえ、いいです・・な？」
私は大きく首を縦に振った。そしてお姉さんに両手を差し出した。
「かわいがってあげてね・・」
「うん。」
お姉さんから子グマを受け取ると、まだ小さかった私の胸の中へギュッと抱き入れた。その時私は最大の味方を手に入れた気持ちと、暗闇から子グマを救い出した様な満足感でいっぱいになった。

父がお金を払ってお店を出る時に、私はふと立ち止まってお姉さんを見た。お姉さんは笑顔で私に手を振っている。しかしそれは私にではなく、子グマに手を振っていたんじゃないかと・・今ではそんな気がする。

「綾ちゃん？」

「ん？」

「行くよ。」

私は少し前で立ち止まっている父に駆け足で追いつくと、差し出している大きかった手を握り締めた。

お昼を少し過ぎていたので私達は商店街の入り口角にあるファーストフード店で食事をとる事にした。父はもう少しまともな食事をとりたかった様だが，外食をあまりしなかったその頃の私はテレビコマーシャルで子供達が大口を開け、楽しそうに食べているハンバーガーは、かなり憧れの食べ物になっていたので断固として譲らなかった。

商店街を歩く人々が見渡せる二回のガラス窓のすぐ横の席に父と向かい合い座る。自分より背の高い椅子に腰掛けた私は覗き込むようにして机から顔を出すと、初めて自分の目の前に並ぶハンバーガーにポテトフライチキンナゲットやオレンジジュース等に心踊らせた。

「クマさんも見る？」

と、私の膝の上に座っていた子グマを机の上に持ち上げた。

「おいしそうでしょーっ！」
はしゃいでいる私をジッと見つめる父はとても自然な笑顔を私に向けていた。
「クマさんを机の上に座らせてあげようよ。」
と子グマのぬいぐるみを持ち上げ、ガラス越しに立てかけるように座らせた。
私は初めて口にするケチャップ混じりの甘い味に夢中になり、知らず知らずのうちに笑顔がこぼれていた。チキンナゲットを不器用にたべている私を見ながら父は、
「おいしい？」
「スパゲティの味がしておいしい。」
父はにっこりと笑うと
「綾ちゃん初めてだっけ？」
「うん。」
私はとても素直に父の前にいた。私をジッと見つめながら笑顔を向けているこの人が私の父さんなのだと、その瞬間には実感できていたのかもしれない・・。

人並みが増えてきた商店街を抜け、駅前百貨店前のバスターミナルでバスを待つ。
父は反省を活かし、バスを降りた時にしっかり時刻表を確認していた様子で，五分と待たずにバスに乗る事が出来た。
私はバスに乗りながら子グマのぬいぐるみに流れては変わる窓の景色を思い浮かぶまま案内した。
「クマさんとは何して遊ぶの？」

父が目をクリッとさせ興味深げに聞いてきた。
「パパは昔、よく話してたなぁ・・。」
「はなし？」
「うん、何でも聞いてくれたんだよ。」
「どんな？」
「どんなだったかなぁ・・忘れちゃったなぁ・・」
父は何かを思い出すように私の膝の上のぬいぐるみを見つめた。私はそんな父の顔を見た時、お店の中で立ち尽くしていた父の気持ちがなんとなく解った気持ちがした。

夕焼けのオレンジ色に包まれ、私と父は屋根と屋根の間に沈みかけた太陽と追っかけっこをしながら帰った。
何処までも追いかけてくる夕日を振り払おうと全速力で走った。いつのまにか家の前を追い越していたのに気づかずに。
「綾ちゃーん。」
私は声に気づき振り返ると、父が玄関の前で大きく手を振っていた。

その日の夜はテレビもつけないで食卓を囲んだ。母の作った特製コロッケが大皿に山盛りとなっている。私は今まで一緒にいられなかった時間を取り戻すように沢山の話しをし，自分でも解るぐらいおどけてみせた。今思えば父の中に強く、私の存在を印象付けさせたかったのかもしれない。そして私自身が一番ほんの一握りでもそれを感じ取り，心の底から一時の安心感を欲しがっていた。

気がつくと私は子グマを抱きしめながら朝の光の中にいた。突然の不安が過り、そして私の横に父の姿はもうなかった・・。
それはいつもと全く同じ朝なのに、全てが違うものだった。ポッカリ空いてしまった私の心の中は何が足りないのかと、幼心に戸惑い左右に空いている空間に父と母の面影を探そうとしても、そこに存在しているのは、きちんと畳まれた布団と儚い現実だけだった。
ただ一つ父が私の横にいないという現実が引き金になっていた事が確かなのは解っていた。自分ではどうしようも出来ない現実と昨日の残像が全て幻だったのかもしれないという不安。私は子グマのぬいぐるみを抱きしめながら、昨日の事が夢ではないようにと、何度も何度も繰り返し，昨日の思い出を心の中に焼き付けていた。

襖を開け，寝室を出ると私はぬいぐるみを左に抱えながら、何かを確かめるため揚げ物の音が聞こえる台所へと歩を進めた。
いつも歩いている廊下なのに一歩進むごと聞こえる。キィと床のきしむ音が私の緊張を徐々に高ぶらせていく。
　気がつけば台所の入り口の前に立っていた。忙しそうにお弁当の支度をしてる母がチラリと私の方を見ると、当たり前のように
「起きたの、歯、磨いてらっしゃい・・」

そこにもやはりいつもと同じ朝が待ちうけていた。
「パパは？」
「もう出たわよ・・昨日良かったねー。」
私はジッとその現実を受け止める事しか出来なかった。いや、そうする他、方法が無かったんだ。

幼稚園でのお弁当の時間。私はフタを開けそこに昨日のコロッケが、おかずとして並んでいるのを確認した時、涙が出てきた。
その涙が頬を伝えば伝うほど私の不安と喪失感は膨らんでいき，そこには先生の心配する声も、動揺している周りの状況も、誰一人として進入する事が許されない一種の孤独がどこまでも私を連れ去って行った。

それからの私は他をさえぎるように、事あるごと子グマのぬいぐるみに報告するようになっていた。それは言葉で話すのではなく，何かを伝え理解してもらう為に、ただじっと子グマを見つめると言う作業だった。
子グマはどんな時でも私を優しく見つめ理解し、私の不安を消し去ってくれた。
そんな気がした。

いつしか私は日常という関わりの中に身を沈めながら、時の流れに心を委ねるようになっていく。それは緩やかなようでとても早く激しい流れだった。

私は一般的な女子学生と同じように、恋をしては喜び、悲しみ、流行り物に目を移しては仲間内で評論し合い、人気絶頂だったアイドル歌手にテレビの前で熱い眼差しを送ったりしながら時を過ごした。

私は自分自身の主張をし続けた。最初は誰一人として聞き入れてくれなかったものが体が成長して行くごとにポツリポツリと耳を傾けてくれる人が現れ始め、その事に私自身が気づいた時、救い様の無い喪失感に襲われた。そこに生じる責任を知ってしまったからである。私は周りに認知してもらおうとするために、そのもどかしさを、不満を口に出していただけであってそれ以上でもそれ以下でもなかったのかもしれない・・。

そんな生活の中で子グマのぬいぐるみは、私の気持ちを押し込めるには余りにも小さな存在になっていき，私の横から本棚の上、押し入れの隅へと次々と居場所を変えていく事になる。

それらの生活の中に父は存在していない。

私は東京の大学に合格し，そのまま流れるように東京で就職した。次々と迫ってくる情報と関わりの中、私は手探りで自分自身を納得させる言葉を必死で覚え、自分の成長を夢みた。そんな最中の時だった。

父の死の知らせを聞いたのは・・・。

最後に生存している父を見たのは三年前、大学を卒業して帰郷した時だった。
いつもの様にあまり言葉は交わさなかった。久しぶりに会った父は髪の毛が真っ白に生え変わっていた。それを目にした時何故か急に心配になって「体大丈夫？」と口にしたのを覚えている。父はいつものように私と目を合わさず、ただ頷いているだけだった。

父は死んだ。その死に顔は今にでも起き上がり、ギョーザを作れと叫びそうだった。
父はギョーザが好きだった。
周りで人々が喪服を着ながら、悲しい顔でお酒を飲んでいなかったら私は棺桶で寝ている父に「そんな所で寝ていると風邪ひくよ」と声をかけていた事だろう。

葬式の夜、誰もいなくなった部屋の中。
私は蛍光灯の薄明かりの下、父の遺影を見つめながら田舎の嘘のような静寂の中で事実を受けとめようと努めてみた。しかし、そう思えば思うほど、私の中で現実味が消えていき，感じた事も無い空洞が頭の隅へ浮かび，それを何かで埋めてくれと世話しなく急き立てつづけられるのだ。
「綾ちゃん・・」
囁くような声で私を呼ぶ声が聞こえ振り向いた。障子の横から喪服を着た母が静かに姿を覗かしていた。
「それ・・」

私は母が抱えているぬいぐるみを見つめ、思わず声を漏らした。
「覚えてる？このクマさん。」
私は小さく微笑むとコクンと頷いた。
「・・ほら、あなたが東京に行く時、一気に色々な物捨てたでしょ？・・あの時、山積みにされたゴミの中にポツンと置いてあったそうよ・・このぬいぐるみ・・・」
そう言うと母は私の横へ来て座り、寂しそうに父の遺影を眺めた。
「捨ててあったの？」
私は自分で自分が信じられなかった。
「お父さんが見つけてきたのよ・・」
「・・・・」
「・・あなたにとっては時が過ぎてただのゴミになってたのかも知れないけど、父さんにとっては・・」
母はそこまで言うと言葉を止め、そっとぬいぐるみを渡してくれた。
「あなたが出てった後、父さんはよくそのぬいぐるみを見つめていたのよ・・」
話をしていたんだ・・。

私は瞬時にその言葉が過った。父はぬいぐるみを見つめながら何か自分の思いを伝えてたんじゃないかと。母はそんな父の背中を見続けていたんだ。
私の父は私の前の父であって母の前の父ではなかった。

当たり前の事だけど、私はその意味を少しの間考えていた・・。
「私ね・・」
「ん？」
「ずっと探してたの・・これ・・」
私がそう言うと母はやさしく微笑んで
「そう・・」
と小さな声で頷いた。

私はぬいぐるみを抱え、月明かりの中にいる。田舎の混じり気の少ない夜空に浮かぶくっきりとした三日月を眺め、私の心はただ虚しかった。
どんなに世間が変わったとしても、夜になるといつも月が浮かんでいるように、私だけが何も変わらず宙に浮いたまま取り残されているような・・そんな気がした・・。

翌日、私は仕事の都合で東京に戻る事になっていた。少し大きめの旅行鞄を片手に家を出る時、母はいつもそうしてくれたように玄関まで見送りに出てくれる。
「行ってらっしゃい。」
「行ってきます。」
当たり前のように使い古したこの言葉を私は何度、母と交わしたのだろうか？思えば私の成長過程、いつもは母そばにいた。
「お母さん・・。」
「ん？」
「・・行ってきます。」

私は自分からこの言葉を言って家を出たかった。
母は何の事かという顔をしていたが、すぐに優しい笑顔を向けて
「行ってらっしゃい！」
と力強く私に言った。

駅へ向かう途中、私は夕焼けに包まれた商店街を通ってみた。少し舗装された道と所々の看板のレタリングが今時のアレンジになっている以外、あの頃の面影を残したまま錆びれる事無く存在していた。
私は父の事を思い出していた。
父を感じる事が出来たあの日の事を・・・。

私は取り返す事の出来ない忘れ物をどれだけしてきたのだろうか？
どんなに心を痛めても、いくら世の中が変わったとしても、それらが再び私の中に戻る事が無いと理解した時、初めて孤独の意味を知り，
それが全ての人に対し平等である事に気づく。

電車の窓から見える景色が変わる度、私は故障したタイムマシンに乗りこみ急激なまでに極端な時空の最中へ投げ出された漂流者の如く恐ろしく突然の不安に襲われた。
「忘れ物は無かったかしら・・」
私は荷台に乗っている鞄を下ろし、大急ぎで中を確認してみた。
そこには小さな子グマのぬいぐるみが私の

不安を見透かしてるかの様に静かにこちらを
見つめていた・・・。

（後書き）

ファーストフード店で聞いた親子の会話が元になったお話でした。
「おいしい？」「スパゲティーみたいで美味しい」その会話を聞いてた片隅でとても癒されたのを思い出します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0025t/

月の影

2011年5月7日08時47分発行